

氏名（本籍）	渡邊 多恵子（茨城県）
学位の種類	博士（看護科学）
学位記番号	博甲第 6659 号
学位授与年月	平成 25 年 5 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	WEB を活用した園児情報記録システムの開発と園児情報活用に関する研究

主査	筑波大学教授	博士(工学)	川口 孝泰
副査	筑波大学准教授	博士(保健学)	柴山 大賀
副査	筑波大学准教授	博士(保健学)	三木 明子
副査	筑波大学講師	博士(医学)	岡田 昌史

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、子どもの健康維持や増進に必要な情報を PDCA（plan-do-check-act）サイクルを活用し、WEB アプリケーションを通じて、一人ひとりの子供たちの力を最大限に引き出すための情報活用システムを構築すると同時に、それらの効果を測るための指標となる「園児情報活用尺度」の開発を行い、その信頼性・妥当性を検証することを目的とした。

（対象と方法）

本研究は、次の 2 つにより行われた。

研究 1. 「園児情報記録システム」の内容的妥当性の検討

システム開発のために専門家チームを結成し、10 回の会議記録から当該システムの機能を、内容分析法を用いて抽出した。さらに構築されたシステムが、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、および実践へのフィードバックへと効果的に活用できるかについての検討を行った。これらの検討では、承諾の得られた保育所を訪問し、保育専門職から、システムの概要、特徴、使い方に関する説明を行ったうえで、実際に 5 か月間の施行を行ない、従来から使用している紙媒体の情報活用との比較を、①一般発達評価票、②社会的スキル尺度、③気になる子どもチェックリスト、④育児環境評価票、⑤保育環境評価票の 5 項目によって行った。

研究 2. 「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討

尺度開発に先立ち、研究 1 で構築した「園児情報記録システム」を実際に使用し、かつ内容を十分に

理解している「保育士グループ」「保健師グループ」、さらにはWEBアプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の異なった視点を持った3グループによって、当該システムの機能に焦点をあてたフォーカス・グループ・インタビューを実施した。その結果から、園児の情報活用に関わる尺度を構成する項目を抽出した。さらに抽出した項目は、保育専門職を対象とした無記名の自記式質問紙調査を実施し、各項目について「全くそう思わない（1点）」から「かなりそう思う（5点）」までの5件法で回答を求め、因子分析により因子構造の確認と尺度項目の選定を行った。統計分析は、下位尺度ごとに信頼性係数を算出し、尺度得点と、職業経験年数、保育環境評価票得点、Communicative and Critical health literacyなどの尺度得点についてSpearmanの順位相関を行い、関連性を評価した。

（結果）

研究1.「園児情報記録システム」の内容的妥当性の検討

【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】の2つが重要カテゴリーとして位置づけられ、【園児情報の基本的活用】には、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」「情報の共有」「情報の補完」、【園児情報の発展的活用】では、「保育目標の明確化」「根拠に基づく支援」「活動の評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」を意味する機能が抽出された。

構築したシステムを導入したのは13施設、従来どおりの紙媒体を継続した保育所は5施設であった。当該システムを用いた施設でのデータ回収数は、①一般発達評価票1746、②社会的スキル尺度1436、③気になる子どもチェックリスト1131、④育児環境評価票175、⑤保育環境評価票8であった。紙媒体におけるデータ回収数は、①一般発達評価票676、②社会的スキル尺度676、③気になる子どもチェックリスト676、④育児環境評価票364、⑤保育環境評価票0であった。

研究2.「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討

因子分析の結果、2因子26項目が、園児情報活用尺度項目として抽出された。2因子の寄与は、第1因子8.47、第2因子7.45、共通性15.92であった。各因子を構成する質問項目の特徴から、第1因子は、「園児情報の発展的活用（12項目）」、第2因子は、「園児情報の基本的活用（14項目）」であった。Cronbachの α 係数は、第1因子 $\alpha=0.93$ 、第2因子 $\alpha=0.90$ 、総合 $\alpha=0.94$ であった。職業経験年数との相関は、 $r=0.32$ ($p<0.001$)、保育環境評価票得点との相関は、 $r=0.26$ ($p=0.001$)であった。Communicative and Critical health literacy尺度との相関は、 $r=0.49$ ($p<0.001$)であった。

（考察）

「園児情報記録システム」は、園児情報の共有が図られ、専門的な介入を行うためのアセスメントに必要な情報の収集と理解、アセスメントの優先事項、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証等、PDCAサイクル展開に当該システムが寄与できる機能を内包することが示唆された。また開発した「園児情報活用尺度」によって、保育専門職自身が、園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人ひとりの子どもの力を最大限に引き出す「園児情報活用スキル」を自己評価し、質の高い専門技術を検討できる可能性が示唆された。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究は、子どもの健康維持や増進に必要な情報をPDCA（plan-do-check-act）サイクルを活用し、WEBアプリケーションを通じて、一人ひとりの子供たちの力を最大限に引き出すための情報活用シス

テムを構築し、さらには、それらの効果を測るための指標となる「園児情報活用尺度」の開発を行った。成長発達段階の途にある子どもの情報は、時々刻々と変化するなかで、それらを効果的に運用できるシステムを提案し、実用化に向けた示唆を行ったことは意義深い。

平成 25 年 3 月 28 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。